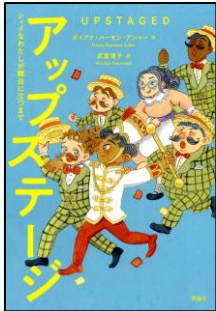


FRIEND

『アップステージ』

-シャイなわたしが舞台に立つまで-

ダイアナ・ハーモン・アシャー/著 武富 博子/訳 評論社



とってもはずかしがり屋のシーラが学校でおこなうミュージカル「ザ・ミュージック・マン」のオーディションを受け、カルテットの1人として出演することに。
 -いつもそばにいて支えてくれる友だち-
 -圧倒的ヒロインの存在-
 -はじめての恋心-
 友だちに背中を押され、一歩踏み出したシーラからたくさんの勇気をもらえる物語。
 また舞台裏の描写が細かく表現されているので、興味がわく一冊。

『希望のひとしずく』

キース・カラブレーゼ/著 代田 亜香子/訳 理論社



もし、願いがかなう井戸があるといわれたら何をお願いしたい？
 アーネスト、ライアン、リジーの中学生の3人だけが知っているトンプキンス井戸の秘密。
 偶然の連続が、やがて奇跡を巻き起こす。
 いたるところにちりばめられた数々の伏線。
 なにげないシーンで一気に回収された時の爽快感はたまらない。
 あなたは友だちのために何ができるだろうか。
 何度でも読みたくなる希望や奇跡を信じたくなるあたたかい物語だ。

『一年四組の窓から』

あさの あつこ/著 光文社



くクラスの中で孤立しないように周りのみんなに合わせて笑ったり、ふるまったりしなくっちゃ。>
 そんなふうにな不安を感じたことはありませんか。主人公・杏里は友だちとのつき合い方に悩みながら、家の事情で転校。
 そこで一真や美穂と出会い、それぞれの家族や友だちとの関係に悩みながらも前へ進んでいく14歳が描かれています。

『ぼっちのままで居場所を見つける』

-孤独許容社会へ-

河野 真太郎/著 筑摩書房



コロナ禍によって友だちと会えない孤独を体験する一方でSNSで常につながっている苦しさを感じたことはありませんか。「ぼっち」という言葉は否定的な意味で使われることが多いですが、自ら積極的に「ぼっち」を選ぶことだってあります。
 この本では様々な作品から孤独の形を読み解き「良い孤独」というものについて語ります。

『みんなに好かれなくていい』

和田 秀樹/著 小学館



友だちは多ければ多いほど幸せなのだろうか。
 クラスの中でうくのが嫌？
 嫌われるのが怖い？
 表面的な友だちの数よりも、気心が知れている関係や、本音を話せ、笑い合えるかどうかが大事なのではないだろうか。
 精神科医である著者が、「友だち」についての考え方に一石を投じる。